

2023年度自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

鎮西学院大学データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会

(責任者名) 吉田 耕平

(役職名) 准教授 運営委員会委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	2023年度「データサイエンス概論」を開講した結果履修率は必修ということもあり履修対象となる1年生の履修率は100%となった。修得状況は、履修者からみた修得率が社会福祉学科90%、外国語学科96.7%、経済政策97.6%となった。
学修成果	授業後に行うGoogle Classroom授業アンケートの結果より学修成果を把握。 学修成果としては、修得率はもちろん、リテラシーレベルの目標である「楽しさ」や「学ぶことの意識」を育てるところにも焦点をあて、学生が興味を持って授業を履修できているかを調査しながら確認する。 調査結果は3か月毎に開かれる「鎮西学院大学データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会」でも共有・報告し、授業の評価・改善に活用する。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	2023年度学期末の授業評価アンケートの結果では5段階評価で4より低い評価があった項目は全14項目のうち次の2項目であった。 ・この授業に関する参考図書を読んだり、各種情報(新聞・雑誌、Webなど)を自分で調べた。ポイント:3.29 ・この授業では、授業外学習(予習復習・課題など)の必要性や内容についてきちんと説明があった:3.8 どちらも学生の自発的な理解度を高める取り組みが不足しているという分析になった。 今後は学期末だけではなく、学期内に複数回調査を行い理解度についても「鎮西学院大学データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会」に共有・報告を行う。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	最終回の講義で、授業後のアンケート項目に後輩等他の学生への推奨度を数字で、推奨ポイントを文章で「データサイエンス概論」履修者に回答してもらう。その回答の結果はHPの「データサイエンス・AI教育プログラム」のページで学生からの意見として紹介する予定である。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	教育プログラムの対象科目である「データサイエンス概論」は全学科必修の科目である。 2023年度入学生では履修率100%、今後入学する全ての学生について(科目等履修生を除く)必修科目として履修を続ける。 2026年度には全学部生で履修中もしくは履修済みになる計画である。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>2027年度には、初の教育プログラム修了者が就職する。その就職先に教育プログラム修了者であることを伝達し、活躍状況を調査することが可能である。卒業生における採用状況や企業評価の検討は「鎮西学院大学データサイエンス・AI教育プログラム運営委員会」で行う。結果はホームページで公開する予定である。</p> <p>本学では「一般社団法人雲仙観光局」との連携推進委員会と、「長崎県中小企業家同友会諫早支部」産学官連携委員会で、ヒアリングを行いリアルタイムで産業界から必要とされていることはなにか、そしてSociety 5.0の実現に向けて教育プログラム修了者に期待される役割を把握する。また同じ場で本学プログラム内容の紹介と手法について広く意見を尋ねる。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>全学科の学生が学修を楽しみ、興味を持ちながら進めることが最も重要である。リテラシーレベルのモデルカリキュラムに則りつつも、実社会の状況に適応したデータを活用した授業を提供し、学生たちの関心を高める。そのために、身近なAIやプログラミングの実践内容も講義で取り入れ、学生たちが楽しみながら学べる環境を整える。楽しいからこそ頑張れるし、興味があるからこそ難しさを感じにくい授業にする。外部の講師も積極的に招き入れ、変化に富んだ授業を提供し、豊かな学修体験ができるようにする。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>Google Classroomにアップロードされた専用の教材を活用し、予習や復習を容易にし、授業水準を維持しつつ、すべての履修者が授業に適切に追いつけるようする。課題は、実践的なタスクを中心に配置することで、分かりやすく、自己理解を促進するものとする。</p>